

# ふれんどしっぷ

1995年10月25日 発行  
郡上八幡国際友好協会  
総務部

## ご挨拶

郡上八幡国際友好協会会長 坂本由之



この度の役員改選により、郡上八幡国際友好協会の会長に就任いたしました坂本由之です。

協会発行の当「ふれんどしっぷ」は、「存じのとおり」「友情」「友好」を意味します。事業を進める中で痛感したことは、国際友好の原点は国内（地域）友好にあるということだと思います。地域交流があるから国際友好も進展します。国際友好を進めることが地域の友好の輪を広げるといふことです。諸外国からさまざまな人々を迎えることによってお互いが多くのことを学びました。同時に、私たちの地域では行政の枠（町村）やムラ意識のようなものを乗り越えて、国際友好の輪を広げてきました。素晴らしい成果だと思います。

アメリカから来た学生の中にはアジア出身の学生も多く、近隣のアジア理解にも大変有益でありました。さらにアジアとの交流を深めることが今後の課題だと思います。また国内の様々な団体とも情報交換・交流をしながらマンネリ化しないよう、新しい可能性を開拓していくことも大切だと思っています。

## 今年も仲間がやってきました！

### 95夏期日本語講座が開催

本年度も夏期休暇を利用して、日本で学びたい北米地域に在籍する学生や、社会人が六月十五日（ここの郡上）にやってきました。

今年も、八幡に二十一名、白鳥に十三名の計三十四名が八月下旬までの日程で、日

本語や日本文化を学びました。留学生は郡内の一般家庭にホームステイし、郡上踊りやパーベキニューパーティー等で楽しんで地元の人々と交流しました。また、茶道や書道等にも積極的にチャレンジし、楽しい思い出と共に郡上の皆さんに感謝をして帰っていききました。

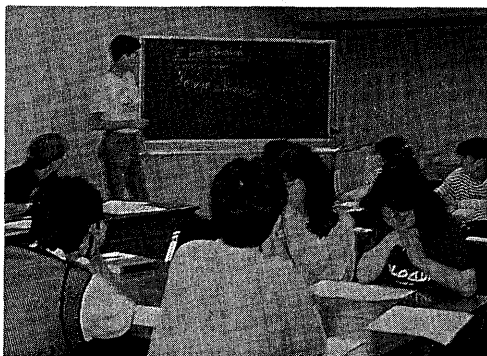


## 英会話教室を終えて

当協会が募集し、八幡英会話サークルのご協力で英会話教室が行われました。

若い受講生にまじって、英語から遠ざかっていた方々も、受講中は、旅行先を想定して、グループを作りながら、互いに会話の勉強ができました。

五回の講座の最後には、今回の留学生を交え、緊張の中にもナマの英会話が聞け、皆さん大変喜んでいました。



## “おいしいよ、おかあさん”

### 相生地区での歓迎会より

六月十七日夕方より相生の照明寺様中庭で、留学生とのコミュニケーションを深めるため、歓迎夕食会が開かれました。

相生地区では、会場となった照明寺（和田正之）様宅をはじめとして、五家族が今回ホストファミリーとなっておられ、当日は、ホスト家庭の皆さんはもちろんのこと、当協会からも、メンバーが、参加しました。



各ホストファミリーが、それぞれ自慢の手料理を一皿ずつ持ち寄っての夕食会であり、学生たちも日本のおかあさんの味に舌づつみを打ち、おいしいおいしいの連発！ また、夕食後は、参加者によるピアノ演奏もあり、時間のたつのをすっかり忘れてしまうぐらい和気あいあいと過ごすことができました。

## ニューヨークから

### お元気ですか？



八幡町の T E A (英語指導助手・第二期 夏期日本語講座受講生) として町内の小中学校で活躍し、今春帰国されたキョニミ・ケイ・リーさん(写真)よりお便りが届きました。

彼女は現在コロンビア大学の大学院にて学んでいるそうです。彼女のご健勝とご活躍をお祈りいたします。

## 世界で活躍中の音楽家たちによる

### 第六回 ブラスの里々郡上八幡

恒例となった、夏期ブラス講習会・ブラスの里々郡上八幡が、七月二十三日～二十五日までの日程で、郡上八幡総合文化センターを会場に行われました。独自の指導法で有名なドイツ出身のブラス演奏者を当地に招き、ブラス愛好家、指導者たちが合宿して、レッスン・指導法の講習等が行われました。ジョイントファミリーコンサートは、受講生はもろろんのこと郡内外の方々に大変好評をいただきました。また、ブラスの里オトプニングコンサートとして、室内音楽のタベ・ダルムシュタットアンサンブルが、七月二十二日(土)午後七時より郡上八幡総合文化センターにて開催されました。



# 夏の思い出

八幡町 武藤英子

「ゲタの音 コロンと一つ 秋深し」

今年の秋はいつもより寂しすぎます。ものすごく暑かった夏の楽しかった出来事はどこへいったのか。今はただ思いにふけています。

「留学生を二カ月あずかってくれないか。」と思いがけない話しが舞い込んできたのは六月初め。外国に知り合いもなく、全く外人と接したことがない私達にはどのように対応したらよいか判らず、ただ断ることしか考えていませんでした。しかし子供は興味本位にOK、主人とは悩んだ末、冒険をしよう、マンネリ化した生活に思い出を作ろうと決心し、不安ながらもOKの返事をしました。

金髪で青い目、鼻すじの通ったまさにアメリカカンドールを預かってみますと、底抜けに明るく、自分の信念をもっている子で、私達をとて信用してくれました。出会うまでの心配は全くなくなり、わが家は今まで以上に明るく生き生きした生活ができました。主人の友達、子供の友達等来客が多いのですが、どんな人にも明るく挨拶をかわしてくれるので、その人達も羨むほどでした。私が一番心配した食事もお母さんの料理おいしいですね。」と言って小食ながら煮物、味噌汁、うどんなど朝食も好んで食べてくれました。「これは何ですか。」一

箸つかむごとに聞かれ香辛料などの説明などしながら2時間くらいかけて夕食をしたこともありません。

相生には五人の留学生がいて、どの子も個性的な子ばかり。朝夕、家に寄ってほしいに勉強したり歌ったり、楽しく交流していたようです。余暇があればすぐ勉強してました。最初はどちらもが辞書片手に話していましたが、一カ月も過ぎると彼女と心のつながりができたせいもあり沢山の会話ができて、別れは、涙、涙、涙でした。二カ月間交流させていただいたことにより、ホストの皆様と知り合い、お手紙・写真などの交換をして、すばらしい宝ができましたと喜んでいきます。友好協会の方々のお力添えありがとうございました。



## ホームステイ体験記

明宝村 清水

二軒で一人の留学生なら、お互いに話し合いながらホームステイができるかもしれない、と不安ながらも引き受けました。原さん宅で前半を終え、わが家へとやってきた。互いに

言葉のわからない者が辞書を使い、読めなければ指をさしたり、マンガを描いたり、意志を伝えるのに懸命で、今思えばと苦笑してしまふ。

一番目立った違いは、起床すると、トイレを使い、洗顔はあとまわしにして食事をし、それからシャワーをというやり方だった。食事といえば、麦御飯、義母手造りの野菜の味噌汁、どちらかという魚類が多い、純粋な和食でした。主人には意地悪している風にみられたが、煮豆を添えると箸で豆をはさむのは上手で練習をしたのではないかと思わされた。義母は耳が遠いため見守っていてくれた。主人や息子たちは仕事に追われて夕食を共にするのが少なかった。日本人は働き過ぎで、家族として成り立っていないと思っていたかもしれない。彼はスポーツマンで原さんに連れて剣道のスポーツ教室へ通い、持参した竹刀で練習をしていた。文化講座では着付け、茶道なども体得し、晴れの舞台では、妹の仕立てた浴衣を着て、お茶の点前を披露した。そんなうれしい事がたくさんあった。又、礼儀正しいふるまいは二十才とは思えない程大人で、彼の家庭がしのばれた。彼を預かることができたのは、原さん家族の援助と、各先生、役員の人達のおかげだったと思う。再度来日を約束して帰途に着いたが、いつ時、抜け殻状態になったのは、我が家だけだったのではなかろうか。

## ホームステイ体験記

大和町 田中和久

「おもしろいですネ」彼は我が家へ足を踏み入れるなりこう言った。それがどんな意味であるのかわからないままの初めてのホームステイが始まった。高一と中一の二人の息子も緊張した様子で帰宅しウィルを交えての夕食を迎えた。もちろん食卓台には辞書が必要であり、お互いに身ぶり手振りや単語をつなげて何とか理解するという状態であった。

長男は昨年大和町の海外派遣で二週間たらずのホームステイ生活の経験があったので、心強いものとなった。一週間程たつとごちなかつた会話にも笑顔が増しお互いに新鮮で楽しい生活となった。

息子の通う英語スクールでは一日講師をしたり夜になるテレビデオ片手に剣道場通いも始めた。そして、神様と仏様の違い南無阿弥陀仏の意味：さまざま日本の文化についても夜遅くまで話した。又、京都、大阪、高山と友達との旅行を楽しんだり、大和町でのウィンドパークでのテイクカット、明宝村千葉家から大和町までの燈火リレーにも私と共に参加し約十キロメートルを走りきった。ウィルとの出会いは、私達に我が祖国と郷土を改めて知ることのできたすばらしい機会であったように思う。八月八日帰国の日、新幹線がホームにはいつてくると二人

人の息子も涙を流し始めた。ウィルもまた、何も言わずしつかりと手を握りあった。我が家への帰りの車中家族四人はしばらくの間言葉がなかった。

言葉の違い習慣の違いがあっても人としての価値観が同じであったり、親を思い、子を思いそして全ての人を思いやる気持ちこそあればわかりあえることを痛感した。数日後「……多くのすばらしい体験をありがとう。田中さんのいないアメリカは淋しい……」との手紙が届いた。

多くの皆様に感謝しながら海の向こうのノッポな息子の幸福と再会を願う日々である。

## ドイツでの結婚式に参列して

八幡町 河合辰之

平成四年から七年までの四年間、「郡上八幡夏期日本語講座」の講師を務められた安藤由夏さん。その由夏さんと学生時代からお付き合いのあった、ドイツ人のカーステン・ダイスさんの結婚式が、十月四日、ドイツのイザロンという町で行われた。私たち夫婦は十月一日から一週間、新婚旅行としてドイツへ向かい、その式に参列した。

イザロンは、デュッセルドルフから東へ、車で約一時間のところにある田舎町。二人の新居もあるこの町の、オーベヤステン教会が結婚式場だった。午後四時三十分、静かな田舎町に神聖な鐘の音が鳴り響き、式が始まった。

神父の先導によって入場する花嫁と花婿。由夏さんの純白のドレス姿に皆うっとり？私たち夫婦は、この結婚式の証人として、二人の契りを見届ける重要な役として立ち会った。

式全体の時間は約四十分。神父の言葉、賛美歌、聖書の朗読、婚礼の儀と進んだ。ドイツ語が全く解らない私全体の内容を把握するのは困難だったが、とても神聖なものを感じたのは確かだった。ただその中の儀式の一つとして、花嫁花婿と参列者全員が一つのパンを分け合い、一斉に口に入れたのには驚いた。訳も解らず、私も同じ行為を行ったが、この儀式は、イエス・キリストの言葉に従った行為で、幸福を誓ったものであったらしい。

式が終わると、レストランを貸し切った披露宴も行われたが、日本のような盛大なものではなく、普通のパーティの様なものだった。ドイツの「結婚」というものの全体を通して感じたのは、全く無理無駄がないということ。例えば：二人が新しい生活に必要な物をリストアップ。それを友人たちが、重複しないように相談し購入。そして当日、お祝いとして持ってくるという堅実なやり方もそう感じさせられた。

異国の結婚式に参列し、友人の幸せそうな笑顔を見ることができ、言葉は話せなくとも陽気で堅実なドイツの人々とふれあえたこの一週間は、本当に有意義な時間を過ごすことができたと確信している。